

剣道を通しての成長

東京都

東京辰武館道場

小学6年 笈川真遙

私は小学三年生の終わり頃から剣道を始めました。今年の一月中でちょうど三年が経ちました。一般的な剣道を始める年としては遅かったと思います。それでも先生がほめてくれた大きな声。その自慢の大きな声を活かして堂々とした面が打てるようがんばりました。基本組はまず礼儀作法。あいさつ、礼、そんきょから始まり竹刀の持ち方振り方。その一つ一つが新しい学びとなり、とても新鮮でした。一步一步できるようになる度に先生がほめてくれました。稽古に行くことが毎回楽しみでした。

しかし、五年生になってからは委員会やクラブ活動などの学校生活がいそがしくなり稽古にうまく身が入らず、いつもダラダラと稽古をしてしまいました。先生にしかられるとすぐにいじけ、稽古と遊びの切り替えができずメリハリをつけられませんでした。うまく状況を変えられないまま五年生が終わり、六年生が始まりました。そして六年生になって間もない頃、先生から手紙をいただきました。中途半端に剣道にのぞむのでは仲間に迷惑だからもっと集中して稽古に取り組もうと書かれていました。一生懸命やるのか、やらないのか、と問われていました。その手紙を読んで、今まで私は強くなりたいと思っている仲間に迷惑をかけていたのだと気づきました。つまり、学校で疲れたからなどと剣道と全く関係のないことを言い訳にして怠けたいという弱い自分に負けていたのです。怠けてもよい稽古などはありません。それにもかかわらず、私は今日は集中して稽古に取り組まなくてもいいと勝手に決めて逃げていたのです。大先生はよくおっしゃいます。「剣道は勝ち負けではない。『打たれて感謝、勝って反省。』相手に勝つのではなく自分に勝たねばならない。」と。逃げたいと思っている自分こそが本当の敵であり、そんな自分に打ち勝つことが大切だったのです。

さらに、大先生はよくA B C Dが大切だとおっしゃいます。A B C DとはA当たり前のことをBバカになってCちゃんとやるDできるまでということです。自分の中の怠けたいという気持ちに負けないで一生懸命稽古に取り組むという当たり前のことこそ大事なのです。当たり前のことを行うということは一見簡単に思えますが、その実それを行うことはとてもむずかしいことです。また、それを持続させるとなるともっと困難になります。

剣道を始めたばかりの三、四年生の頃は竹刀をまともに振れず足さばきもバラバラでした。しかし、様々なことを乗り越えて少しずつ努力を重ねたことで今では以前よりも上達しました。小学校での剣道はあともう少し。これからも、自分の決めた目標に向かって日々努力を重ねて、残りの短い間も悔いが残らないように思いっきりバカになってやり尽くしたいです。